

精いっぱい生きる

夜はふけているのに、孫（小学六年）の同級生から突然電話がかかってきた。「おばさん！ 早く来て！ お母さんが、お母さんが大変なの！」と言って、後は泣き声のみ。早速、孫の母（わが家の嫁）が駆けつけた。倒れ臥す母親に幼い兄妹がすがりついて泣き合っているではないか。

遅い夕食の片付けをしていたら、突然激痛が走り動けなくなつたのである。嫁はあまりのことにぼう然となつたが、すぐに友人である医院の奥さんを思い出して急報。快諾した医師のおかげで応急処置ができた。診断は「過労」。

この母子はまだ若い父を急病で失い、遺族年金さえもない。だから、母は保険勧誘を職として日夜駆け回り、子らは家事を受け持つ。母として心身の過労はたまりにたまつたのだろう。

部屋を片付けていた嫁がふとお仏壇を見ると、通信簿などが重ねられている上の一枚の文が目に入った。

「お父さん、○雄も○子もよくやってくれています。あしたも頑張ります」。

亡き夫に報告し、その愛に祈り、明日もまた強く生きんとする母子三人。

あしたも頑張ります。―ああ、あなたはなんと悲しい言葉を、霊前にささげられるのでしよう。他人の私でさえ、ひとり今こう書きつける時、涙はとめどなく流れるのです。

しかし、悲しみと同情の涙ではない。精いっぱい生きているあなたの心が、私の心の底に響くのです。精いっぱい生きる姿は、この世で最も美しく、最も尊い。だから、逆境であつても、精いっぱい生きているならば、最高の幸せであろう。真の幸せとはそこにしかない。教育といい、福祉というが、ひとが精いっぱい生きること助ける、それを唯一の目標とするものでなければならぬ。

(一九八三年八月二十二日)